

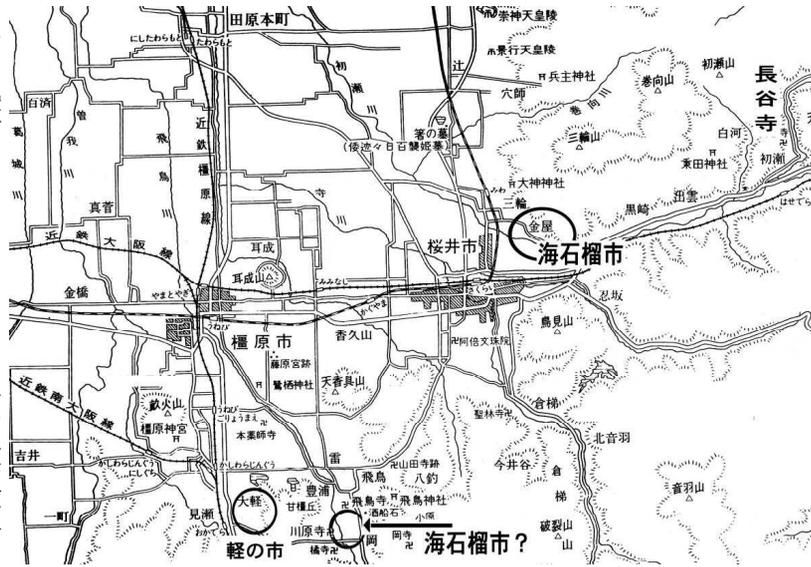
海石榴市の八十の衢に立ち平し結びし紐を解かまく惜しも

【語釈】

*海石榴市：『枕草子』に、「市は、辰の市・里の市。海柘榴市、大和にあまたあるなかに、泊瀬に詣づる人のかならずそこに泊るは、観音の縁のあるにやと、心ことなり」とある。「大和にあまたある」は、大和には市が多くある意であるが、契沖は大和には海石榴市という市がいくつもある意ともとれること、また『豊後国風土記』の大野郡（今、大分県豊後大野市）にも「海石榴市」という地名があること、そして『日本書紀』にてくる海石榴市の地名は一ヶ所ではなく、今の天理市の石上神宮あたりと、明日香村の橋寺近くと、右の『枕草子』がいう長谷寺へゆく道の三輪山の南、今の桜井市金屋あたりと、少なくとも奈良県には三ヶ所あったとする。しかし石上神宮のあたりと推定している『日本書紀』武烈紀の海石榴市は、歌垣で会いたいという記事の中に出てくるもので、歌垣で有名な桜井市金屋の海石榴市である。

ただし海石榴市の地名は、九州の豊後国にもあり、また鳥取市にもあり『延喜式』「神名帳」に因幡国八上郡都波只知上神社）、一般的な地名だった。「海石榴」は『倭名類聚鈔』卷二〇に椿のこととある。古代、市場には樹木を植えたらしく「東の市の植木の木垂るまで」（310）と詠んだ歌もある。市場に植える代表的な木が椿だったのだろう。

*八十の衢：チマタは道の分岐するところ、八十は多い意味で、多くの道が交わるところの意。方々から人々が集まることができるところから、そこは交通の要所でもあり、また物資の売買が行なわれる所にもなった。市が立てばまたそこには人々がさらに集う。2506番では、多くの人の話し声が飛び交うことから、「言霊」が活動する場とも考えられて、占いにも利用された。さらに市は男女の出会いの場ともなり、前掲のように海石榴市は歌掛けが盛んに行なわれた市であったことは『日本書紀』武烈紀の記事に



よって知れる。

*立ち平し…この語、次のように、万葉集・巻九の手児の伝説歌にもあった。

1808 勝鹿の真間の井を見れば立ち平し水汲ましけむ手児奈し思ほゆ

これは、井にしよつちゆう水汲みに出掛けていった意味である。旅に行くことを旅立つともいう。しかしまた歌垣で歌を掛け合うことを「立つ」（武烈紀）ともいうことから、「立ち平し」が歌垣に特有の表現だとも考えられる。字義どおりにとれば、立つて足で地面を踏みつけて平にするのである。またナラスからは、並ぶとか鳴らすという語も連想され、歌垣は人垣（＝並ぶ）をつくって行なわれたこと、足踏みをすれば音が出る（＝鳴らす）ことなど、歌垣の場の人々の具体的な様子を思わせる。こうしたことから土屋・私注は「地を踏み平し」と解し、伊藤・釈注も「広場を踏みつけ踏みつけて躍った時に」と解する。

ちなみに、地面を踏みつけることは、日本文化のなかでは、地を堅めて悪い地霊を鎮める意味があった。市には古代から市神も祭られていたし、そんなことから「立ち平し」の呪術的な意味が考えられる。

*結びし紐：男女が恋の約束をして結んだ着物の紐。

*解かまく惜しも：「解かまく」の「まく」は動詞を名詞化する語で、解くこと、の意。

「惜しも」の「も」は詠嘆。——（紐を）解くのは惜しいことよ。なお、2554番には「見まくの欲し」という語があった。

【総釈】

語釈で述べたように、大和の海石榴市では歌垣が行なわれたことが、『日本書紀』『古事記』の物語から知られる。『古事記』によれば、ヲケの命（後に即位して顕宗天皇と平群氏の祖先志毘臣が、一人の女性を争い、海石榴市の歌垣に参加して、歌の掛け合いで決着を付けようとしている。

歌垣が廢れたあとも、市場は男女の出会いの場だった。それは、平安時代の『大和物語』（第103段）に、「平中が色好みけるさかりに、市に往きけり。中ごろは、よき人々市に行きてなむ、色好むわざはしける」（平中は平貞文。西暦九〇〇年ごろの人。好色者として有名で『平中物語』は彼の恋愛話を集めた物語）とあることから知れよう。

さてこの歌は、海石榴市の歌垣から生まれた歌と思われる。歌垣では多くの歌がうたい交わされたが、歌掛けのまとまった歌は、万葉集に残されてはいない。しかし歌垣から生まれたと思われる歌は何首もあって、これまでも指摘したとおりである。歌垣では男女の集団による掛け合い歌もあった。中西・講談社文庫は2951番歌について「これもその折の集団歌」とし、集団歌であるゆえに、前半の二句を一定の歌い出しとして多くの替え歌がうたわれたのではないかと推定している。

この歌の解釈としては、男歌、女歌、どっちにも受けとれそうである。しかしたとえ

ば、
A 「海石榴市の八十の衢に立ち平し／結びし紐を解かまく惜しも」

と切つて読むか、それとも、

B 「海石榴市の八十の衢に立ち平し結びし紐を／解かまく惜しも」と切つて読むかで場面は多少違つてくる。

Aの場合は、ある相手との約束の紐をすでに結んでいた者が、今、海石榴市の歌垣にきている。つまりこの人には思いを交わした相手がすでにいた。Bの場合も、この人には思いを交わした相手がすでにいたが、しかし約束を交わして紐を結びあつた相手は、以前、海石榴市の歌垣で出会つた人であり、今、歌垣とは別の情況のなかでその紐を解かくか解かないかという問題に直面しているのであろう。ただし、もちろん、以前結んだのも海石榴市の場、今解くことになつたのもその歌垣の場だとしても意味は通じる。

Bのような解釈をした場合は、この歌の場が歌垣から離れるけれども、それもまた可能な解釈である。

これを女性の歌ととつてみよう。彼女は歌垣で出会つて互いに紐を結んで愛を誓い合つた男がいたけれども、今ほかの男に言い寄られている。そのとき、男を拒否する歌だとすることもできるだろう。あるいは、かつて歌垣で出会い、固く紐を結び合つた男とは、その後関係が切れてしまった。もう、この結んだ紐を解いてしまおう、とは思ふものの、やはりまだ未練があつて解くことができない。そんな揺れ動く気持ちを詠んだ歌としてとることもできるかもしれない。

またAのようにとつた場合は、歌垣で魅力的な相手と出会つたものの、それ以前に紐を結んで約束した相手を裏切れない気持ちで詠んだものと解釈することができる。この場合は男の歌と見てもいいだろう。いずれも新しく出現した相手に対するためらいの気持ちを詠んだ歌と解釈することができる。